

第1回ウォーカブル推進協議会 会議録

1 日 時 令和8年1月13日（火） 14：00～15：40

2 場 所 福島市市民センター 3階 314会議室B

3 出席者 委員12名

村上 早紀子	会長、	小河 日出男	副会長、	坪井 大雄	委員
谷口 隆治	委員、	長内 由佳	委員、	金田 覚	委員
門脇 由香	委員、	厚海 一三	委員、	黒沢 英紀	委員
小林 さやか	委員、	鈴木 悠司	委員、	広瀬 はるか	委員

4 欠席者 委員 0名

5 内 容

- (1) あいさつ
- (2) 委員紹介
- (3) 会長及び副会長選出
- (4) 議事
 - ① ウォーカブル推進協議会について
 - ② まちなかの現状と他都市の事例について
 - ③ 意見交換
- (5) その他

6 概 要 事務局説明後、質疑応答、意見交換

7 会議詳細

- (1) あいさつ
都市政策部次長より
- (2) 委員紹介
委員による自己紹介
- (3) 会長及び副会長選出
事務局案の提示 会長：村上早紀子委員、副会長：小河日出男委員
- (4) 議事
 - ①ウォーカブル推進協議会について
事務局説明後（資料P1～11）、意見交換

委 員

文化通りは、時間帯によって車が通らない区間がある。また風景が良く、若者が写真を撮ったり、インスタグラムなどのSNSに投稿する動画を撮影したりする場としても使われており、過去には映画の撮影場所として利用された実績もある。こうした特徴を生かしながら、マルシェの開催や、人が歩いて回れる空間づくりを進めていくことで、他の通りも含めた回遊性のあるまちにしていきたい、という意見が出ていた。これらのような参加者それぞれの思いが次々と出され、終了予定時刻ぎりぎりまで意見交換が続いていた。

②まちなかの現状と他都市の事例について

事務局説明後（資料P12～30）、意見交換

副会長

実際にイベントは各所で実践されているものの、来場者を迎える、ゆっくり過ごしてもらう「おもてなしの場」が十分に整っていない状況である。具体的には、晴天時だけでなく、雨天時にも対応できるテントや、椅子・テーブルといった着席できる環境が不可欠であり、特に夏場の暑さや冬場の寒さへの対策を含めた設備の不足が課題として挙げられる。現状では、天候や季節条件によっては、安心して滞留できる空間が確保できていないケースが多い。直近の取組として自身で開催したイベントでは、通常の簡易テントではなく、鉄骨構造の大型テントを設置し、約350人分の椅子とテーブルを配置したうえで暖房設備も導入した。同様の取組を前年も行っており、屋外は寒く雨が降る状況で歩行者は少数であったものの、テント内は満席が続き、開催時間から夜8時まで立ち見が出るほどの盛況が3日間継続した。このイベントは、酒を中心とした内容であったが、単に立ち寄るのではなく、時間をかけて楽しむ来場者が多く、福島市内にとどまらず、東北各地や宇都宮方面など広域からの来訪が見られた。アンケート結果からも、こうした滞留型の空間づくりが来場動機につながっていることが確認されている。

これらの取組を通じ、適切な設備を整えれば、季節や天候に左右されずに集客が可能であると感じた。一方で、場所の確保が難しいため、屋外イベントの少ない冬の時期を選ばざるを得ないという事情もあった。

今後は飲食や音楽といったイベントだけでなく、子ども向けの内容や絵画等のギャラリーなど文化的な静かな場づくりのイベントも年間を通してやっていきたいと思っている。

委 員

西口の観光案内所に寄せられる相談として最も多いのは、特定の目的地に対する質問だけでなく、「2時間程度で回れる適当な場所はないか」という内容である。これは、国内客に限らず、外国人観光客においても共通して見られる。

散歩やウォーキングの滞在先として、あづま総合運動公園や美術館周辺などを案内すると非常に喜ばれる。一方で、「まちなかをゆっくり2時間ほど歩き、店舗を巡ったり、お茶をしたりしながら過ごしたい」という要望に対しては、具体的に提案できるデータや資料が十分に整備されていないため、実際に場所はあるのだろうが、現状ではなかなか提案しきれていない状況である。

福島駅周辺では、これまでまちづくりに関する様々な取組が行われてきた。福島の商業の中心地として道路に多くの店舗が立ち並び、にぎわいを見せていたパセオ通り（旧すずらん通り）では、当時の

ウォーカブルの取り組みが行われていたと認識している。具体的には、一方通行にし、道路を蛇行・起伏をつけることで車の走行速度を抑えながら、ストリートファニチャーの設置や行商人によるマルシェの実施などである。しかしながら、現状を見ると、日中のぎわいは限定的であり、夜の街という印象が強くなっていることから、本来意図していた昼間の滞留や回遊の創出には十分つながらなかったと考えている。その要因の一つとして、テイクアウトした飲食物をベンチで楽しむといったスタイルが、当時としてはやや先行しすぎており、地域や来街者に十分に浸透しなかった可能性がある。また、設置されているストリートファニチャーは著名なデザイナーの作品で質の高いものであった。ハード面では優れた整備がなされたものの、それを十分に使いこなし、周囲に広げていくソフト面の取組が不足していた可能性がある。

このようなまちづくりは非常に難しいテーマではあるが、現在、文化通り周辺には思わず覗いてみたいくなる魅力的な店舗も増えつつあり、若い世代の新たな動きも見られる。城のような明確なシンボルとなる建物が残っていない中で、まちなか全体を歩いてもらい、駅東西の回遊性を生み出すことは容易ではないが、工夫次第では今が一つの好機であるとも感じている。

本日は具体的な結論を示す段階ではないが、皆様の意見を伺いながら自身の考えを整理し、より良いまちづくりにつなげていきたいと思う。

会長

当時は「ウォーカブル」といった言葉自体は用いられていなかったものの、結果として福島なりに歩行者を中心としたまちづくりの実践や試行錯誤は行われてきたものと受け止めている。

これまでの取組には反省すべき点もあるが、改善可能な部分は着実に見直しつつ、現在新たに生まれつつある魅力的な要素は積極的に生かし、それらをつないでいくことが重要である。その積み重ねにより、歩きたくなるまちづくり、いわゆるウォーカブルなまちづくりを段階的に推進していくことができると思う。

委員

先日、まちなかにある駐車場の所有者と意見交換を行ったところ、中合百貨店が営業中の最も利用されていた時期に対して、新型コロナウイルス感染症の影響により利用が大きく落ち込んだ時期は、売上が半分まで減少したと言っていた。その後、コロナ禍が収束する中で、現在の年間売上は7～8割程度まで回復しているものの、ピーク時と比較すると依然として減少傾向であるとのこと。この状況からも、駅東側エリアを中心とした再開発の取組が、まちなかに人を呼び戻す上で極めて重要であると認識している。さまざまな事情があることは承知しているが、まちなかの活性化を図るためにには、可能な限り早期に再開発の整備を進めることができると想う。

交通面に関しては、郡山市の駅前エリアで、スタートアップ企業による自走式ロープウェイの導入を検討しているという情報がある。実現性については今後の検討を要するものの、比較的低コストで導入可能とされており、実現すればまちなかの回遊性や雰囲気向上にも寄与する可能性がある。今後の検討にあたっての一例として、ぜひ参考にしていただきたい。

委 員

こうした取組は把握しており、現在情報収集を進めているところである。特に、公共交通分野においては運転士不足が深刻化しており、時代の変化に対応するという観点からも、自動運転等こうした取組の検討は必要であると感じている。

一方で、まちなかで大規模ショッピングセンターのように大量の駐車場を確保することは、現実的に難しい状況にある。そのため、中心市街地におけるまちづくりにおいては、福島市の実情に即したモビリティの在り方について、今後も検討していく必要がある。

現状として、ウォーカブル推進区域エリアにおいては、1回100円で運行している市内循環バスの通行区間も含まれている。また、路線バスは、現在QRコード決済やクレジットカード決済が可能で利便性が高まっており、交通系ICカード(Suica等)にも対応できるよう進めているところである。

移動手段については、目的地までの往復すべてをバスで移動する必要はないと思う。例えば、行きは徒歩で移動し帰りはバスを利用する、あるいは途中まで歩いてから公共交通を利用するといった多様な選択肢が考えられる。そのような複数の移動手段の一つとして、バスを位置づけ、来街者や市民が柔軟に選択できる環境を整えていくことが、まちのにぎわいにとって重要であると思う。

会 長

公共交通は欠かせない存在であり、私自身もバスを利用したいと考えている。他都市では燃料高騰などの影響で100円バスの運行が難しくなった例もあるが、福島市では継続して運行していただいている、ウォーカブルの観点からもありがたい取り組みだと感じている。

委 員

福島市出身であり、学生時代から社会人となった現在に至るまで長くまちなかを見てきたが、この20年ほどの間に、中心市街地における人の流れは大きく減少してきたと強く感じている。こうした状況は、早期に対策を講じなければ戻らないと考えており、その意味でも東口エリアの再開発は、まちなか再生の核となる取組であることは間違いない。

現状を見ると、県庁所在地の駅前として、ここまで人通りが少ない状況は全国的に見ても珍しいと感じている。だからこそ、東口・西口それぞれの将来像や方向性が、できるだけ早く明確に示されることが重要であると考えている。

一方で、再開発区域以外にも、文化通りをはじめとした魅力的なエリアが多数存在していると感じている。こうしたエリアにおいて、新たな事業に挑戦する若者をいかに呼び込めるかが、今後の重要な視点である。

市においては、まちなかへ出店する際の内外装工事費や家賃等を補助する制度が用意されていると認識しているが、今後は、こうした制度の発信や支援の強化を図っていただきたい。

スタートアップ企業の誘致も重要であるが、それに加えて、飲食店や服飾・雑貨など、小規模であっても個性ある事業を若者が次々と立ち上げられる環境づくりが求められる。こうした小さな挑戦が積み重なり、まちなかに活気が生まれる状態を目指していくことが望ましいと考えている。

委 員

実際に出店する際に市の家賃および内外装工事費等の補助金を申請したが、交付対象が昼間営業の業態に限られており、バー営業は対象外であった。そのため、自己資金でスマートスタートし、店舗改装も自らDIYで行った上で開業した。

若者は必ずしも十分な資金を持っているわけではないが、20～30代を中心に、起業や店舗開業に意欲を持つ人は決して少なくないと感じている。そうした若者がまちなかで一步を踏み出しやすくなるよう、業態や営業形態に応じて、より使いやすい支援制度や柔軟な運用があるとありがたい。

現状では駅からの若者の来街動線がパセオ通り付近で止まってしまい、稻荷神社周辺まで歩いて来る人が少ない印象である。一方で、稻荷神社の祭礼時には多くの若者が訪れており、潜在的な集客力は十分にあると感じている。

こうした状況を踏まえると、日常的にぎわうエリアとしていくためには、例えば、エリアマップの作成や、インスタグラム等のSNSやアプリを活用し、写真映えするスポットの紹介など、若者の行動様式に即した情報提供が有効である。目的を持ってまち歩きを楽しめる仕組みを整えることで、来街者の回遊性向上につながると思う。

委 員

にぎわい創出の観点から、イベントの実施は非常に重要であると思う。再開発による新たな施設整備は、人を呼び込む力があるのできっかけとして大いに有効であるが、日常的にまちを歩き回る動機をいかに生み出すかが、今後のまちづくりにおいて重要であると認識している。

中心市街地には、規模は小さいものの魅力的な店舗が点在しており、こうした「点」をいかにつなげていくかが、ウォーカブルなまちづくりの本質であると考えている。

先ほどのパセオ通り（旧すずらん通り）に関する取組は大変興味深い事例である。我々の団体も、にぎわい広場・さんかく広場・しかく広場において、ストリートファニチャーを設置する社会実験を行っており、今後は、こうした取組を他のエリアにも展開するなど、横断的に広げていくことが有効と考えている。

委 員

イベント開催時には子どもを含めて家族で駅前に出かけることもあるが、子どもにとっては安全面の不安が大きく、常に手をにぎって目を離せないため、自由に遊ばせることが難しい。子どもを解き放つて安全に遊ばせながら、大人も同時にイベントやまちなかを楽しめるような空間があることが望ましいと感じている。

まちなか広場は、車道が近く車の往来もあり、実際に自分の子どもが事故に遭いかけた経験もある。そのため、子どもに注意を促さなくても安全が確保される空間が必要だと思う。

こむこむは、雨天時や暑い時期に屋外施設の代替として利用したい施設である一方、近くの駐車場が混雑しやすいことや、公共交通、とりわけバス利用のしにくさに課題を感じている。駅からの徒歩移動も、小さな子どもを連れて雨の中を移動することは現実的ではなく、駅や駐車場から雨に濡れずにこむこむへアクセスできる動線が確保されるのが望ましい。

今後伊達で開業予定の大型商業施設は、福島市のまちなかにも大きな影響を与えると考えられるものの、まちなかには人の顔が見える、個性ある店舗が点在している点に独自の魅力がある。こうした個店

を巡る楽しさは、まちなかならではの価値であり、それぞれの店舗が連携し、面的に分かりやすく発信できるような仕組みづくりが重要である。

ストリートカルチャーやストリートファニチャーに関して、特に福島駅前では鳥のフンが気になり、子どもを座らせることに躊躇する場面が多い。街路や広場の環境衛生や快適性の確保も、駅前開発における重要な視点である。

委 員

資料P 3に示されたイメージ図のような空間であれば、自身も積極的に歩きたくなると感じた。

一方で、ウォーカブル推進区域においてこのようなまちづくりを推進するためには、理念や目的に合致する新規出店や改修に対して、出店費や改装費の一部を支援するといった制度的な後押しがあるとよい。

具体例として、震災後の相馬市では、城跡周辺を観光地化する過程において、市の建物や小学校跡地の活用とあわせ、同様のコンセプトで区域内の住宅や商店を新築・改修した事業者を対象に補助金制度を設けており、非常に話題になった記憶がある。福島市においても、歩きたくなるまちづくりを進める上で、同様の制度を検討する余地があると思う。

アプリの活用についても、歩くことでポイントや特典が得られる仕組みは、まちを楽しむ動機づけになるだけでなく、健康づくりの観点からも有効である。福島県でも健康増進施策を進めている中で、福島市内に特化したアプリを導入し、ポイント制度や各種サービスを一体的に紐づけることで、若者から高齢者までがまちなかに出かけたくなる仕組みづくりにつながるのではと考える。

人通りの多いまちは規模にかかわらず、アーケードを有している場合が多い。駅前通りでは過去にアーケードを撤去した経緯があり、また維持費もかかることから、従来型のアーケード整備は容易ではない。そのため、日差しや雨をしのげる全天候型の屋外空間をどのように確保するかは、今後検討すべき重要な課題である。

郊外の大型商業施設へ消費流出が一定程度生じることを踏まえつつも、それを抑制・補完するためには、まちなかでしか味わえない体験や機能を市民に提示することが重要である。そういった選択肢をつくるうえでも、本協議会の意義は大きいと感じている。

委 員

福島市の中心市街地は車道・歩道ともに幅が狭く、車両と歩行者が混在することで危険な状況が生じていると聞くことが多い。特に並木通りに設置されている車止めは、高さや位置が中途半端で、つまずきやすく危険性が高いと感じている。また、車の通行速度が速い区間もあり、小さな子どもや高齢者、体の不自由な方が安心して歩ける環境とは言い難い。限られた道路空間ではあるが、安全性の確保は極めて重要であり、丁寧な検討が必要である。その上で、歩道が広く、安心して歩けるだけでなく、可能であれば立ち止まって滞在できる空間がまちなかに増えしていくことに期待する。

MAXふくしま、アオウゼ、福島市街なか交流館などの施設では想像以上に若者の利用が多く、特に福島市街なか交流館は、高校生で満席になる日も多い。若者が街から離れているという印象が語られることがあるが、実際には学校や塾の合間時間あるいは保護者の送迎待ちの時間などに、駅前で多くの若者が滞在している実態がある。

こうした状況を踏まえ、合間時間に暑い日でも安心して過ごせる滞在空間が重要である。かつてはま

ちなみに自然と若者が集まり、遊んだり過ごしたりできる場所が多く存在していたが、現在はそうした受け皿が減少していると考えている。今後の駅前・中心市街地のまちづくりにおいては、若者が日常的に滞在できる居場所づくりも重要な視点である。

委 員

鳥害について、福島駅東口・西口のみならず、新幹線ホームにおいてもフンが落ちてくると多くの声が寄せられている。こうした課題は、福島駅に限らず郡山駅においても、駅舎や新幹線ホームで同様に生じており、レーザー照射や音による対策など、各種手法を試行しているものの、十分な成果には至っていないのが現状である。事業者単独での対応には限界があり、今後は市とも連携しながら、駆除を含めた実効性のある対策を検討していく必要がある。

福島駅東口・西口を結ぶ改札内の通路では、不定期ではあるが産直販売や臨時列車運行時の売店設置、クリスマスコンサート等のイベントを実施しており、入場券が必要ではあるものの、駅構内に人を呼び込む取組を継続的に実施している。

私自身市外から新幹線で福島市へ通勤しており、同様の通勤者が多数見受けられる。朝夕、同じ列車で往復する利用者が多いため、こうした定期券利用者が、休日には家族を連れて福島市内を歩きたくなるようなまちになればよい。

福島市は地下道が多く、日陰としては有効である一方、薄暗く、人通りが少ない印象があり、全体として寂しさを感じた。また、福島駅から河川沿い、福島城周辺、天神橋通り、パセオ通りなどを歩いてみると、素敵でノスタルジックな建物が数多く残っているにもかかわらず、それを十分に活かしきれていない印象である。既存の建物や街並みといった資産を活用し、散策ルートやまち歩きコースとして分かりやすく提示することで、回遊性の向上につながると思う。

子ども連れでまちを歩く際の課題として、トイレや休憩場所の確保、子ども連れでも入りやすい飲食店や滞在施設が必要である。私自身自家用車を持たず、公共交通を中心とした生活を送っているため、徒歩や公共交通で移動する人の視点に立った環境整備が重要であると考えている。

会 長

福島駅は市内外から訪れる人にとっての出発点・入口に当たる重要な場所であり、新幹線ホームを含めた駅全体の在り方は、今後のまちづくりにおいて大きな意味を持つ。あわせて、先ほど意見のあった鳥害対策についても、喫緊の課題として受け止めており、今後の検討課題の一つとして、具体的な対策の在り方を整理していきたい。

今回の意見交換は、特定の方向性を即座に取りまとめる段階ではないものの、委員から非常に前向きで示唆に富む意見が多く出されたと思う。市外事例をそのまま模倣するのではなく、福島市がこれまで積み重ねてきた取組や実践を大切にしつつ、反省点や改善すべき点については柔軟に見直していく姿勢が重要である。集客力の向上といった観点だけでなく、福島らしさを活かしながら、まちなかの活性化と居心地の良さを両立させたまちづくりを楽しく前向きに進めていきたい。